
Multi-directional Cranial Distraction Osteogenesis (MCDO)法を用いた 症候群性頭蓋骨縫合早期癒合症に対する治療戦略

亀田 雅博、 鰐淵 昌彦
(大阪医科薬科大学病院 脳神経外科)

【背景】

クルーゾン病やアペール症候群に代表される症候群性頭蓋骨縫合早期癒合症の治療においては、複数回の手術を必要とすることが多い。外固定型の Multi-directional Cranial Distraction Osteogenesis (MCDO)法は、内固定型の従来型延長法と同等の頭蓋容積拡大量を約半分の延長期間で得られることや、形態修正の自由度が高く、より良い頭蓋形態を作る上で有用である。症候群性頭蓋骨縫合早期癒合症に対する MCDO 法による治療の有用性を報告する。

【方法】

症候群性頭蓋骨縫合早期癒合症について MCDO 法による治療を実施した症例。

【結果】

MCDO 法による治療は、MCDO フレームを頭蓋骨に固定できるだけの頭蓋骨の厚みが必要で、1 歳以降の患児に対して実施していることから、治療時期に応じて異なる術式選択を行った。すなわち、乳児期に初回治療となったケースでは、まず後方延長術を行うことで頭蓋容積を効率よく確保し、1 歳以降の 2 回目の手術で、頭蓋容積の拡大ならびに頭蓋形態の改善を狙って、MCDO 法による治療を実施した。また、日本人のこどもの矢状断における標準頭蓋形態を参考に延長を実施しており、これは、MCDO 法における延長方向の決定にあたり有用で、延長後良好な頭蓋形態を得ることができた。

【結論】

治療時期に応じて後方延長術と MCDO 法による治療を組み合わせることで、症候群性頭蓋骨縫合早期癒合症に対して、頭蓋容積の拡大のみならず、頭蓋形態の改善も得ることが可能である。